

乳児股関節超音波検診の開設

山田 尚武、北田 一史、甲斐 史敏、竹中 孝、
成田 渉、石橋 秀信、長谷 齊武
(みどりヶ丘病院 整形外科)

【目的】

近年、发育性股関節形成不全（Developmental dysplasia of hip:以下 DDH）は患者数が減少している一方、一般の乳児検診では発見されない見逃し例が問題となってきた。2015 年 1 月以降、当院で出生した乳児に対して、乳児股関節超音波検診を開始した。今回の目的はその成績を検討することである。

【方法】

対象は 2015 年以来エコー検診を行った男児 204 例女児 170 例、748 関節、検診時平均日齢は 110 日であった。エコー検診では Graf 分類を用いて分類し、Graf type II 以上に対しては、二次検診として単純 X 線像を撮像した。

【結果】

Graf type I 以外は 20 関節あり、その全てに単純 X 線像を撮像した。二次検診の中で股関節脱臼は 4 関節、臼蓋形成不全は 8 関節、異常なしは 8 関節（偽陽性率は 40%）であった。

【考察】

DDH の症例数に減少に伴い、整形外科医が検診などに関与することが減ってきている。今回、われわれは新たに超音波を用いた乳児股関節検診を開始した。脱臼例を発見はできたが、整形外科医一人で行っているため、超音波検査士などと協力し、拡充が望ましい。また、近年では新生児突然死症候群予防のため、仰臥位就寝を促進するようになり、向き癖および斜頭を生じている症例が散見される。向き癖は、体幹の傾斜を引き起こし、片側下肢が内転位となり、DDH の誘因となりうる。今後は、検診活動だけでなく、向き癖予防および抱き方指導などの、DDH 予防活動にも力を入れていきたい。

【結論】

乳児股関節超音波検診を開始し、DDH を発見することはできた。今後、より検診活動を拡充し、DDH の予防活動にも尽力していきたい。